

小林多喜二 『党生活者』

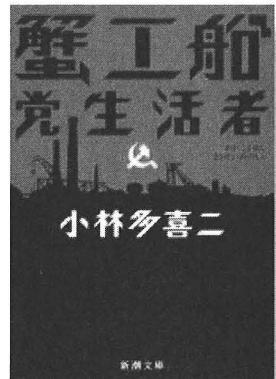
『蟹工船』とともに

山田正行（やまだ まさゆき／大阪教育大学、社会教育学）

世界市場、グローバル資本主義の危機により日本でも労働強化や失業が深刻化し、二〇〇八年は『蟹工船』が話題になり、流行語大賞のトップテンに選ばれた。二一世紀に継承されたのは小林多喜二であり、彼を虐殺した天皇制ファシズムではなかった。

『蟹工船』は確かにプロレタリア文学の代表作だが、私は『党生活者』も名作だと考える。これらを読んだのは、学生時代だった。当時、私は東京下町でセツルメント運動から地域教育文化運動に関わり（学生運動は苦手だった）、公然と「共産黨員」だと表明する人たちに会った。レッドパージで気象庁を追われ、生活と健康を守る会で活動していた老ポリシェヴィキ、東大、一橋大、東京外大と入学したがいずれも学生運動で除籍され、四人の息子を育てながら活動していた女性、北海道の炭坑地区で中学を卒業して上京し労働運動や政治運動に奮闘したが一線から退いた男性等々。女性は「意義と任務の桁で動きたくないわ」と議論しながら、生き生きとした「細胞」のようにあちこちで活動していた。男性は毎日「赤旗」を読み、議論し、時々「トッキュー」などと口にしていた。私はそこから時代は異なるが「党生活者」の雰囲気を感じた。今でも記憶しているが、手帳をなくしたとき、私は単に困ったという程度だったが、周りはいつともより厳しかった。若造だからと寛容だったふだんとは違っていた。私の手帳の内容など大したことはなかったが、「党生活者」として見過ごせなかったのだろう。

『党生活者』は、一九二八年の「三・一五事件」、二九年の「四・一六事件」、三一年九月一八日の満州事変（柳條湖事件）と、国内で統制弾圧が激化し国外で侵略戦争が拡大する状況下、三三年二月二十日の多喜二虐殺後に発表された（検閲を通すために「転換時代」として『中央公論』四月、五月号に掲載）。そこでは、非合法とされ活動が困難を極める共産黨員が軍需工場で反戦や生活防衛などで支持を広げようと奮闘する姿が描かれている。革命により搾取と支配を終わらせ全人類を解放しようと闘う革命家の生活に「党」が貫かれているが、社会の隅々にまで監視や密告のシステムが張り巡らされた全体主義国家において、周囲に悟られないため「笠原」という女性と同棲する一方で同志の「伊藤」という女性の強さにも惹かれる。残酷な弾圧に遭う危険性に満ちた極限状況においてなお闘う革命家の「党生活」に、二人の女性との関係が織り込まれる。このため、『党生活者』は党内では避けられ、党外では批判され、それは「ハウス・キーパー」や文学と政治の関係などへと展開した。作品



として未完であることを考慮すべきという弁護もあるが、やはり基調は批判となっている。

しかし、多喜二は革命家としても、作家としても誠実に真摯に現実と格闘し、これを描き出したと、私は考える。たとえ前篇しか遺されていないが、それでもこの作品は一つの世界を構成しており、そこから多喜二の思想も文学も読みとれる。

むしろ、治安維持法が失効となった戦後でも「ハウス・キーパー」を続け、それを糊塗し、また容認、傍観した者たちの偽善を知ると、多喜二の実直さはなお一層鮮明になる。志保田行(福田玲三)は「プロレタリア・ヒューマニズムとは何か―宮本顕治氏の所説について」(『労働運動研究』一九九八年九月号〜十一月号。ネットで見られる)で、共産党中央財政部だった遠藤忠夫の「レッドパーージ後 国際派の中央委員は志賀氏を除いて、それぞれ個人的に秘密のアジトを作り、女性の秘書を置いた。組織的に承認を得てアジトを持ち、そこに女を近づけなかったのは、蔵原氏についてはよく知らないが、国際派中央委員のなかで春日庄次郎氏だけだった。春日氏はハウス・キーパー制度に絶対反対、夫婦の方のところに同居し、その夫婦に世話してもらっていた。人間的にきれいなのは彼だけだった。宮本氏のアジトは目黒にあるという風聞だった。まあ、いわば妾宅だ。それを思想の一致とかいつて、ろくに金も与えないで世話させていたんだ。春日氏を除いてすべてそうだった」という証言を紹介している。当時、宮本顕治は百合子と夫婦関係にあったにもかかわらず、百合子の秘書であった大森寿恵子と浮気をしていた。さらに、党中央選挙対策の責任者を務めた岩田英一は、一九五一年一月二一日「百合子さんが死んだとき、その場に宮本顕治がいなかったことは誰でも知っている。死んだあと、大森寿恵子の家から駆けつけてきたのだ。百合子の近辺にいる文学者たち、中野重治、佐多稲子など皆このことを知っているんじゃないか。誰から聞いたというんではなく、何となく耳に入っている」と証言した(志保田行「不実の文学―宮本顕治氏の文学について」一九九五年労働者文学賞評論部門入選)。そして文壇や論壇の特質を踏まえれば宮本の不倫は党外でも「何となく耳に入って」と考えられる。死人に口なしで何も言えない多喜二を批判しながら、党中央の幹部について口をつぐむなら、それは卑屈な二重基準であると言わざるを得ない。

それ故、私は隠れて欲望を充足していた偽善者やその傍観者より、生命と人生を懸けて闘いつつ、誠実に内面と現実を描き出した多喜二を高く評価する。そこには裏表なく地道に粘り強く活動した多くの「党生活者」が凝縮されている。

さらに、多喜二は教条的イデオロギーに制約されずプロレタリア文学の枠組みを脱していたと私は考える。手塚英孝は「今までのプロレタリア小説の型から抜け出ようと、努力してみた作品です。……私はこの作品の成果を特に注目しています。単なる失敗をおそれずに書いたものです」と述べている(『小林多喜二』筑摩書房、一九五八年、二三二頁)。だからこそ魯迅も小林を高く評価したのである(同志小林の死を聞いて)。

『党生活者』の主人公は二人の女性をそれぞれ要領よく使い分けなどしていない。ここには、宮本顕治初代秘書の寺尾五郎が宮本について「潜行活動な感情や情愛とも格闘しつつ女性に対して真摯に誠実にあるうとしている。ここには、宮本顕治初代秘書の寺尾五郎が宮本について「潜行活動なうまく使ったな、少しうま過ぎるじゃないか」と評した点はない(前掲『プロレタリア・ヒューマニズムとは何か』)。ここでは人生を思想に捧げ、生活において常に「党」を貫こうとしながら、人間らしい感情や情愛を完全に押し殺すことはできず、その葛藤矛盾の中で前進し成長す

るといふ緊迫した文学的世界が創りだされている。これはプロレタリア文学の粹組みには入りきれないが、革命思想や弁証法に立脚しており、だからこそ私は多喜二がプロレタリア文学を超えていたと見るのである。そもそも人間は矛盾した存在であり、矛盾こそ普遍的である。それ故、多喜二の文学には普遍的な意義がある。この評価の鍵になるのが『党生活者』である。

さらに「ハウス・キーパー」に関連して多喜二の実生活を問う議論もあるが、澤地久枝は明確に「愛」と概括している（『小林多喜二への愛』、『続昭和のおんな』文藝春秋、一九八三年）。クリスチャンの作家三浦綾子が視点を多喜二の母に据え、多くの資料や取材に基づいてまとめた『母』（角川書店、一九九二年）もこの点を補強している。彼の生き方は決して「うま過ぎる」ようなものではない。

そして、ペンは剣よりも強し。歴史は残酷に虐殺した強権体制ではなく、それと闘い続けた多喜二を選択した。官憲は冷酷残酷に性器まで破壊した上で甲狀軟骨（のど仏）を折り多喜二を緩慢に窒息死させた（安田徳太郎『思い出す人びと』青土社、一九七六年、二〇四頁）。ところが、その手先で虐殺の現場を指揮した中川成夫は過去を隠して東京北区教育委員長になり、一九六八年一月十五日の成人式における「区長をかこむ座談会」に出席し、「いつまでも勉強をやめないでほしい。一人前になつたといえ、いろんなことで行きつまりを感じた時は、率直に周囲の人に相談することが大切です。私どもは束縛はしませんが、しっかりと根性をもって、社会教育で開設する勉強の場などを活用し、自分をよりよく発展させていってほしいと思います」と発言した（『北区の社会教育』第五八号、一九六八年一月三二日、二頁）。体制は変わり、中川も変わり、それは多喜二が目指していた方向であった（未達成だが）。もし多喜二がこの発言を聞いたら、その明るい性格から「そうさ！中川君。分かってきたじゃないか！」と快哉を発しただろう。

もちろんこれは善意に受けとつたブラック・ユーモアも含む想像であり、戦争犯罪は曖昧にせず究明しなければならない。中川が過去を隠し続けて一九七四年に没したことは、たとえ再出発して教育者として業績をあげたとしても、償いきれないものである。犯行に加えて証拠隠滅、逃亡、さらに反動（逆コース）まである。これは戦後文部行政で復権した大達茂雄（文相）、奥野誠亮（文相）、緒方信一（文部次官）、田中義男（文部次官）、さらに中川の上司の毛利基特高課長への東久邇内閣の「功績顕著」特別表彰、その上司の安倍源基警視庁特高部長（A級戦犯だが不起訴・釈放）への叙勲でも同様で、みな「うま過ぎる」。しかし、血まみれの過去をいくら飾ろうとも、隠したままでは雪（そそ）げない。むしろ、虚飾により血まみれの実体がますます醜悪かつ滑稽になる。逆に、多喜二は時代を超えて読み継がれ、輝き続け、さらに歴史を創る。